

## 岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN

NO. 23

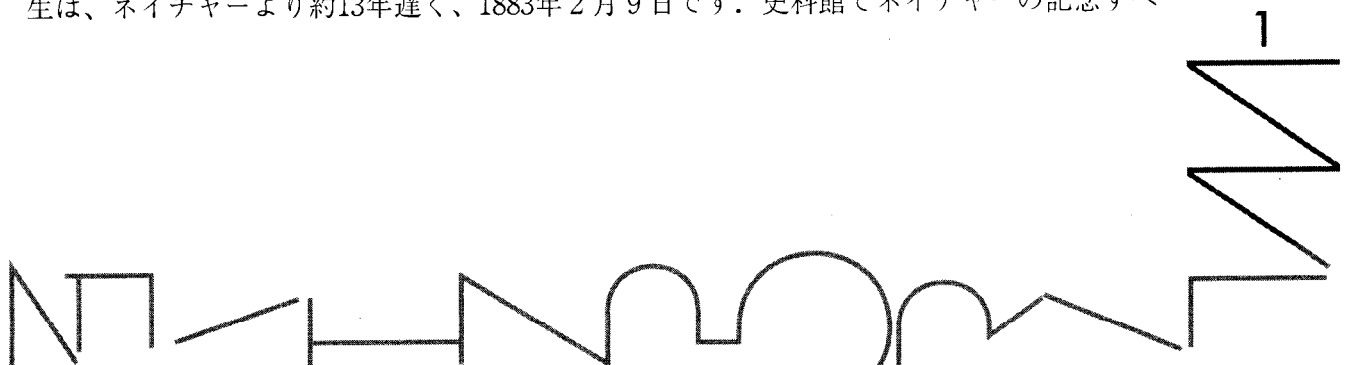
1996  
MARCH

### 史料館の中の世界

本吉 總男

現在、資源生物科学研究所のキャンパスの中に、新しく建てられた史料館、すなわち附属図書館資源生物科学研究所分館があります。史料館は、大正時代の古い分館の建物の跡地に建てられ、昨年1月にオープンして、やっと1年が経ったところです。史料館は小さいながら、高度情報化時代にふさわしく近代的な外観と明るい閲覧室をもっています。また一方では、その名称にふさわしく、貴重本や古い文献を多数蔵書しております。ここに蔵書されている貴重本のコレクションであるペツファー文庫、大原漢籍文庫、大原農書文庫などは、いろいろな機会に紹介しておりますので、知っておられる方もありますが、これらばかりではありません。史料館の蔵書は、「財団法人大原奨農会農業研究所」設立以来、「資源生物科学研究所」の今日に至る80年間の研究所の歴史を反映したものであり、それぞれの時代の自然や科学を知る豊富な資料が保存されております。

古い学術雑誌にもまた貴重なものがあります。例えば、英国の学術雑誌ネイチャーや米国のサイエンスのバックナンバーが第1巻からあります。ネイチャーやサイエンスは現在においても自然科学分野における最も重要な国際的学術雑誌で、両雑誌とも常に時代の最先端を行く論文や情報を掲載しております。ネイチャーの第1巻第1号は1869年11月4日の発行ですから、わが国では明治初頭（明治2年）に当たります。また、サイエンスの誕生は、ネイチャーより約13年遅く、1883年2月9日です。史料館でネイチャーの記念すべ



き第1号の冒頭を調べたところ、トーマス H.ハクスリーの文章が序文として載せてありましたので、少し紹介して見たいと思います。

ハクスリーという人は、ロンドンの王立医学校で医学を学び、21歳の時、船医の助手として王国軍艦に乗り、4年間海洋生物の研究をしていたようです。その間、それらの研究成果を王国の学術雑誌に次々と発表し、高い評価を受け、帰国後26歳でロイヤルソサエティーの会員になりました。ハクスリーは航海中、オーストラリアで恋仲となったヘンリエッタと結婚し、子供に恵まれました。その子孫の中には、生物学者で哲学者のサー ジュリアン ハクスリーや、ノーベル賞（医学生理学賞）を受けた生理学者サー アンドリュウ ハクスリーがおります。1860年代のトーマス ハクスリーの研究は、古生物学、分類学、人種学など幅広いものであり、哲学や神学にも傾倒していたとのこと。最も有名なのは、チャールズ ダーウインの進化論を強力に支持したことです。ダーウインの種の起源は1859年に出版され、当時の科学、思想や宗教に与えた影響は極めて大きいものでした。ネイチャーの第1号の発刊は、種の起源の10年後ですから、恐らく、生物学が最も激しく近代的なものに変化していった時期に当たると思います。

ハクスリーの文章の中では、自然の本質を思考するゲーテの長い韻文を引用しております。このドイツ最大の詩人は、自然科学者としても重要な人物であり、顎間骨の発見や色彩論などが著名です。ここに載せられているゲーテの文は、英語への訳文で、ハクスリー自身理想的な訳文であるかどうか危惧しているようであり、それをまた拙い日本語にすることもできかねるので、英文のまま引用します。

“Nature! We are surrounded and embraced by her; powerless to separate ourselves from her, and powerless to penetrate beyond her. Without asking, or warning, she snatches us up into her circling dance, and whirls us on until we are tired, and drop from her arms. ----”

というように始まり、いくつものセンテンスがあつて、最後に、

“---- She is complete, but never finished. As she works now, so can she always work. Everyone sees her in his own fashion. She hides under a thousand names and phrases, and is always the same. She has brought me here and will also lead me away. I trust her. She may scold me, but she will not hate her work. It was not I who spoke of her. No! What is false and what is true, she has spoken it all. The fault, the merit, is all hers.”

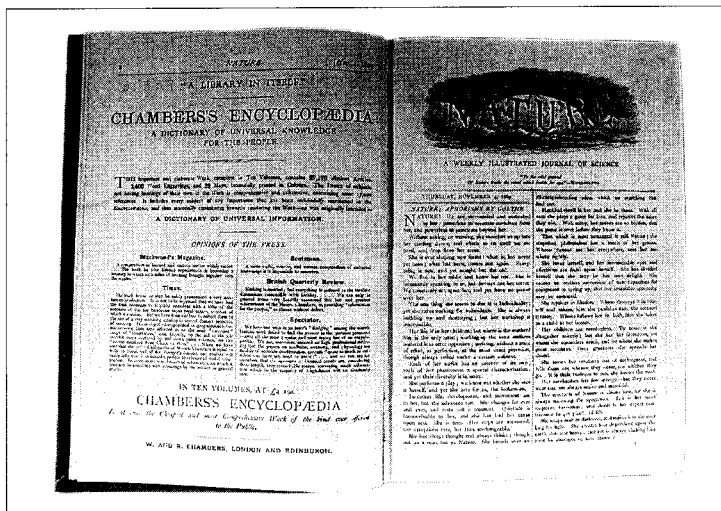
で終わっています。

ハクスリーは、この文章が若い頃から好きで、学術雑誌ネイチャーのオープニングアर्टイクルを編集者から頼まれたとき、このラプソディーをすぐに思い浮かべたと書いております。これによってハクスリーは、自然の驚きを、自然を科学する原点として示したのだらうと思います。ゲーテは、1828年に書いたフォン ミューラーという人に宛てた書簡のなかで、あの文章を書いたのは、1780年頃で、彼は比較解剖学に専念しており、その文章にあるような心境だったとしております。その中から彼は顎間骨を発見し、また植物の変態および頭蓋骨の研究に進み、ドイツの博物学者たちに認められるようになりました。ゲーテは、原点となったあの文章から、洞察が深まり行き、究極に至る50年間を振り返ってみると、笑いを禁じ得ないとしています。さらにこの書簡から40年経った現在、ハクスリーは、ゲーテが究極としたものは陳腐なものになり、われわれはすでに究極の究極を知っているとのべています。そして、さらに半世紀の後、ネイチャーのバックナンバーを見



る人は、われわれが為した最上のものを見て、笑いを禁じを得ないだろうが、あの詩人の見解は、自然の驚異と神秘のシンボルであり続けるだろうと結んでいます。それから、半世紀どころではなく、126年もたってしまいました。ゲーテやハクスリーは、いまの自然をどう考えるでしょうか。

ハクスリーの文章は、彼がまだ生きて語っているようです。われわれはいつも新しい文献の検索に追われ、それを見付けるのみに図書館を利用していることが多いのですが、時には努力して古い文献を探ってみると、過去に生きた人の心に触れ、なにか価値あるものを発見できるかも知れません。他の大きな図書館と比べると、史料館はいかにもこじんまりとしていますが、そこにもまた、時空をこえた世界が広がっているように思われます。  
(もとよし・ふさお 資源生物科学研究所分館長)



## 共済会より図書資料の寄贈がありました

この度、岡山大学共済会（会長 小坂学長）から附属図書館に図書資料1,390冊の寄贈がありました。この中には『中日辞典』、“Chemical Abstracts Twelfth Collective Index”、“Britannica”等の参考図書多数やビデオ資料も含まれています。末永く活用できるよう受入の手続きを取りました。

この誌上をお借りして、ご尽力いただきました関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

# 新館建築とフロアプラン

東海安興

## はじめに

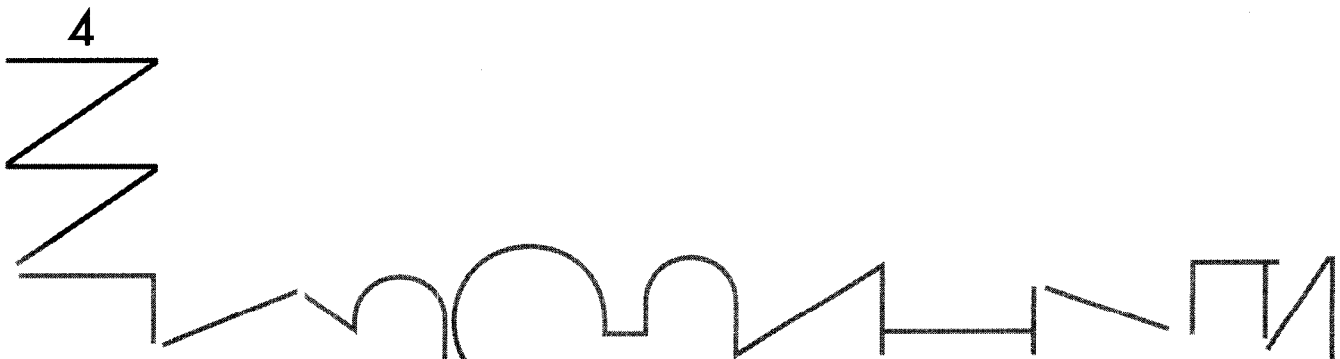
このテーマに関しては既に本誌 (No.22) において、簡単に照会しましたが、このプランは今後の中期、長期の図書館構想を視野に入れていきます。現在の新営 (第1期) の完成後、第2期には旧館の諸施設の整備を、更に第3期には総合設備を行う予定になっています。

## 増築の特徴

- 1) 将来を見通して、随時自由設計を可能としたこと
- 2) 各フロア毎のレイアウトをできるだけ均一化したこと
- 3) 電子図書館化をめざしたこと
- 4) 利用者スペースを最大限に確保したこと
- 5) 一般利用者に関しても配慮したこと

## 特徴の具体化

- 1) 学習・研究図書機能の整備
  - ・ 閲覧用机は一人用 (大型版) をできる限り多く配置する。(新館1~4F)
  - ・ 研究個室、学習用個室を設け、論文等の作成等を支援する。(新館4F、旧館4F)
  - ・ 共同研究室、グループ研究室、グループ学習室、演習室を設ける。(新館2~4F)
  - ・ ラウンジコーナーを設けて、ゆとりと情報交換の場所とする。(新館1~4F)
  - ・ 総合インフォメーションコーナーにおいて効率よい利用案内等を行う。(旧館2F)
- 2) ニューメディアへの対応
  - ・ CD-ROM等の設置は1Fをメインに、各フロアにはOPACコーナーを設ける。(新館1~4F、旧館2・3F)
  - ・ 総合情報処理センターの支援のもとに全学共用のWS等を配置し、学内外情報ネットワークの利用を促進する。(新館1~4F、旧館1~3F)
  - ・ 視聴覚資料用の機器 (ビデオ、レーザーディスク等) を配置する。(新館1F)
  - ・ 電子図書館化に向けて、電算関係スペースを大幅に確保する。(新館5F)
- 3) 国際化への対応
  - ・ 留学生コーナーを設け、出身国の学術情報等を収集する。(旧館1F)
  - ・ インターネット、学内LANを通して学術情報の受発信基地とする。
- 4) 地域社会への公開
  - ・ 閲覧席を増加することにより、地域住民等の利用拡大を促進する。
  - ・ 常設展示室を設け、特殊資料を学内外に広く公開する。(新館5F)
  - ・ 放送大学学園等の学生に対して、利用の便宜を図る。



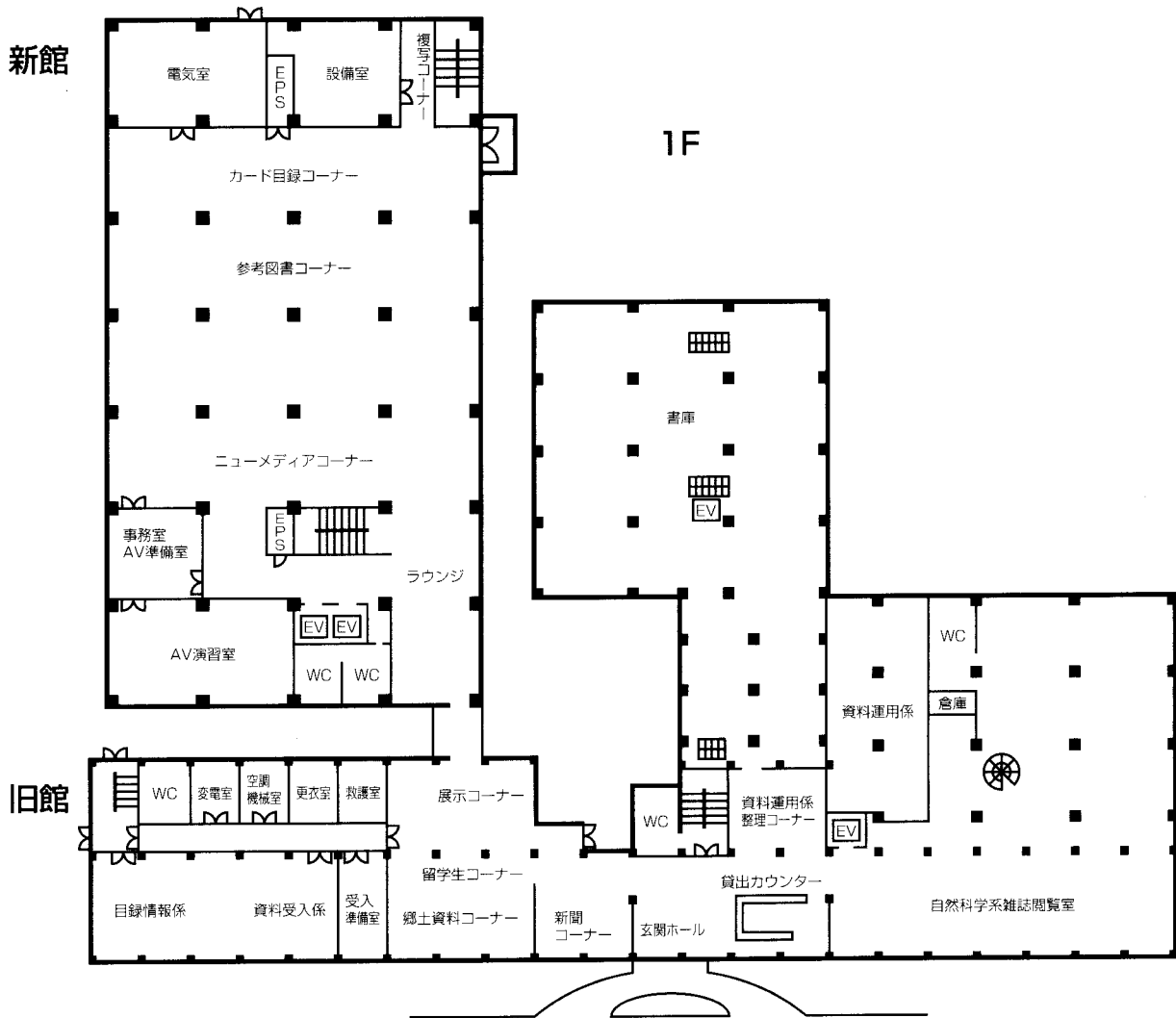
5) 資料の保存

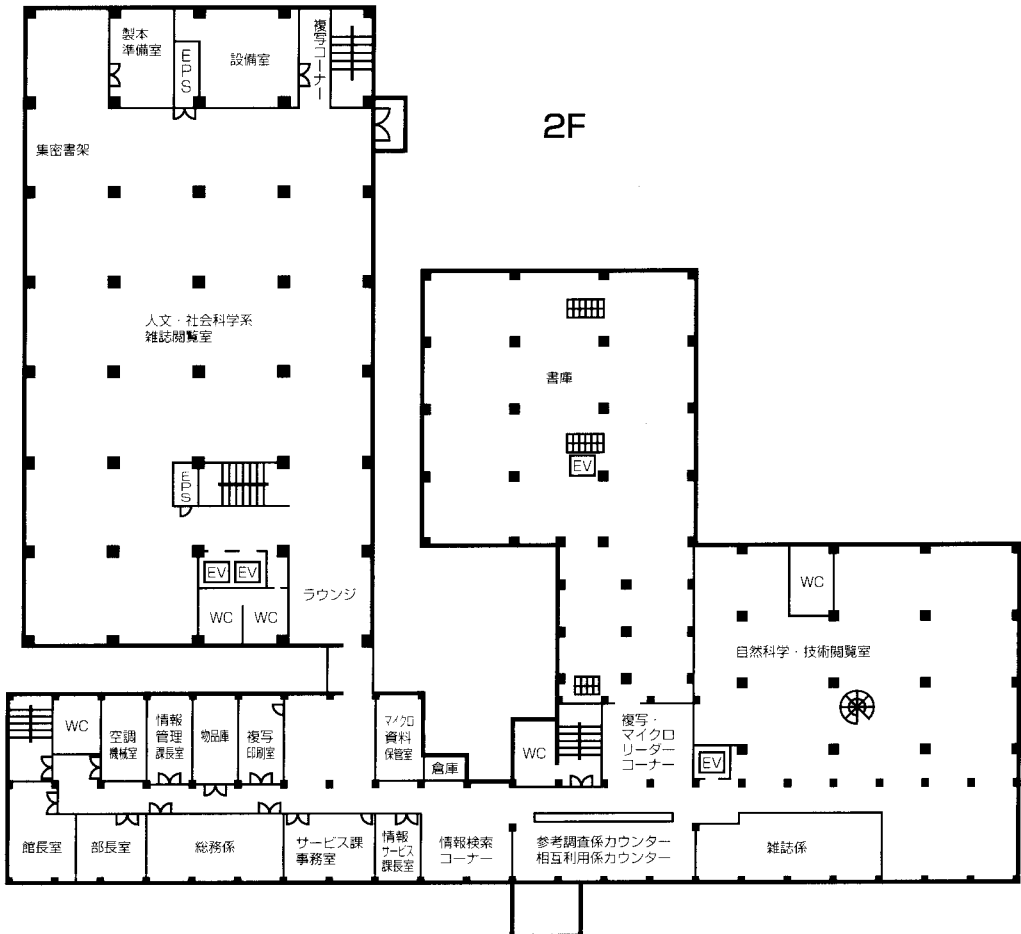
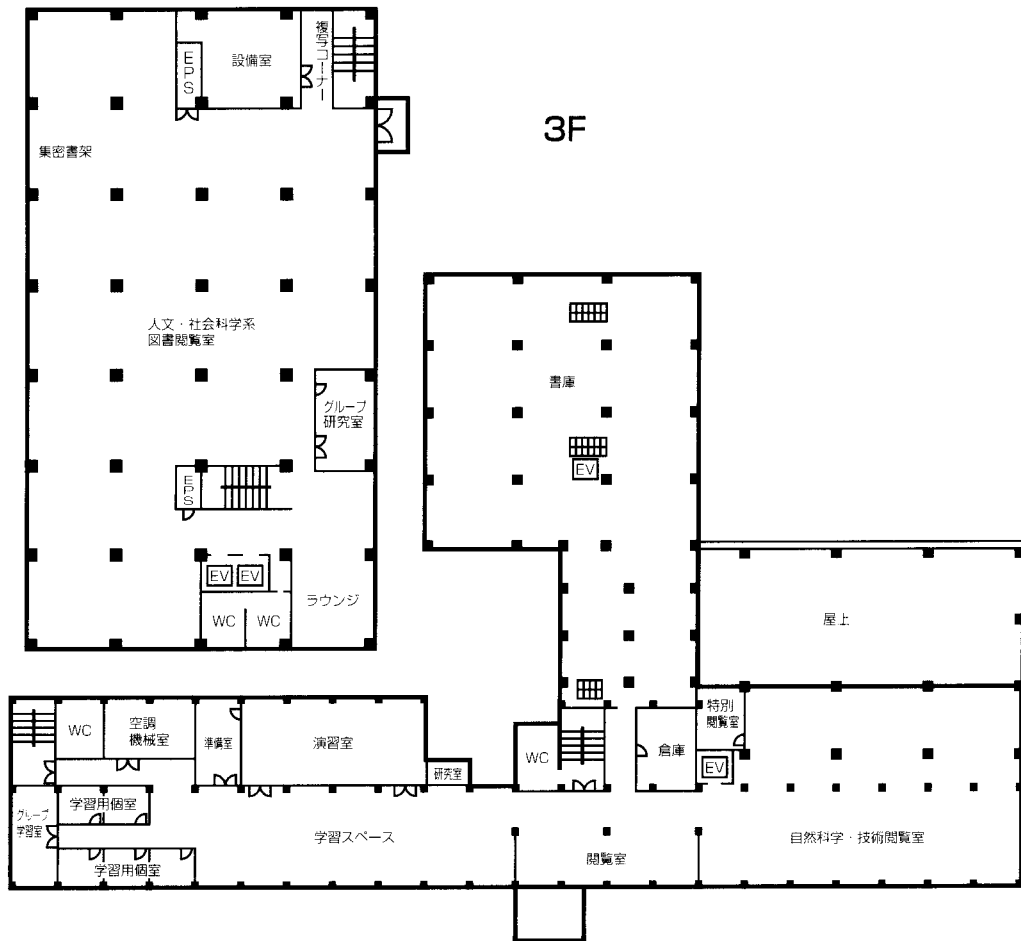
- ・特別収蔵庫を設置して、重要文化財の『信長記』を嚴重管理する。(新館5F)
- ・特殊資料書庫には約20万点を保管する。(新館5F)
- ・特殊資料演習室では、特殊資料を用いて教官の講義等に利用する。(新館5F)

おわりに

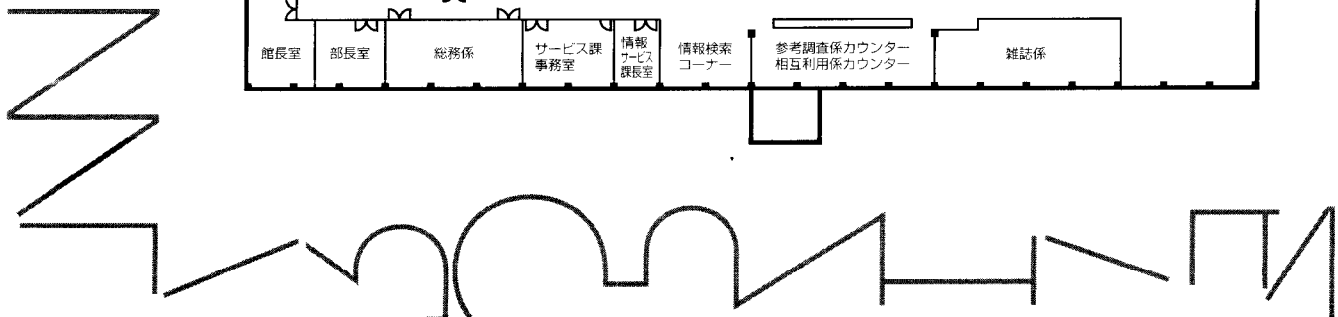
この稿を終るにあたり、新営計画に携わったものとして筆者が特に述べたいことがあります。それは常に「増築」で問題になるのは既設部分との関わり合いです。重要なポイントは効率のよい動線であるか否かです。様々な悪条件があっても常に利用者の目線になって検討されることが必要なことであると確信しています。

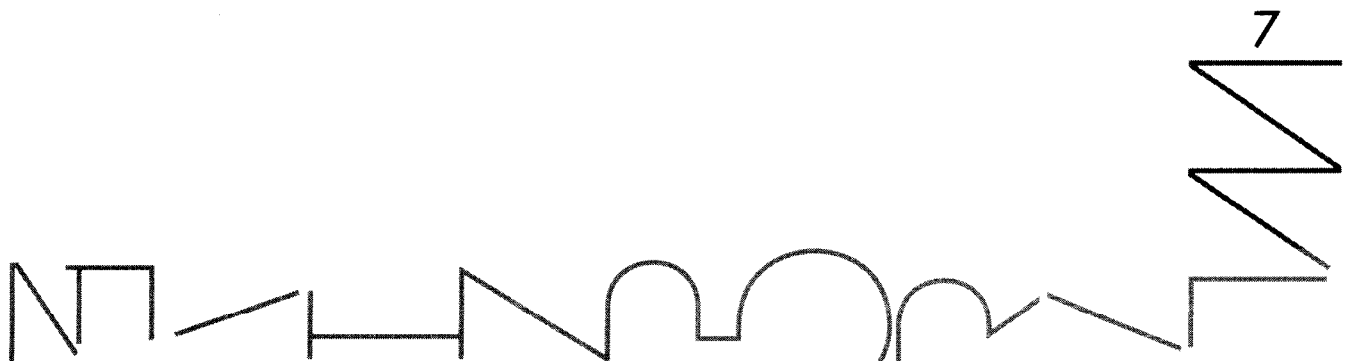
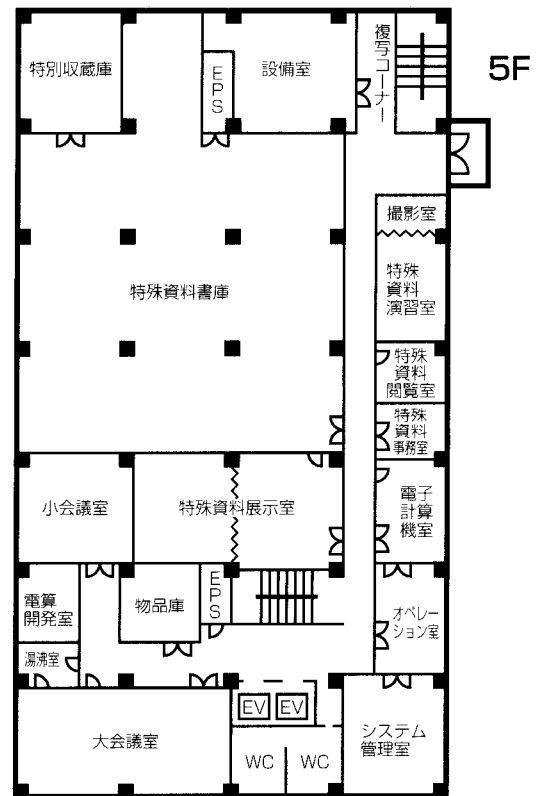
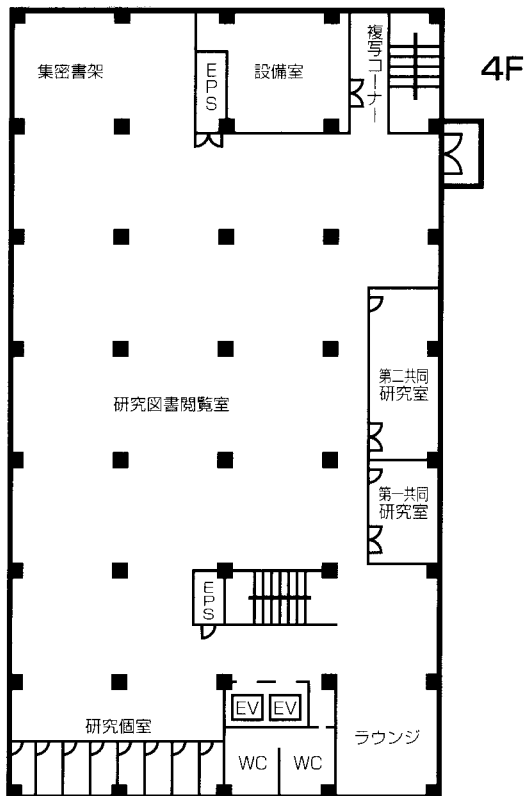
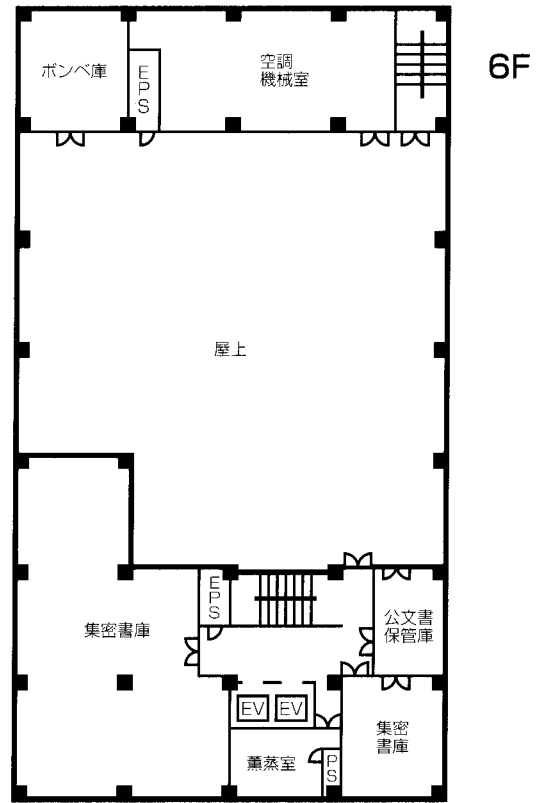
(とうかい・やすおき 附属図書館情報管理課長)





6





# 私の著書：『大学図書館図書資料論』

神 立 春 樹

この年初に、『大学図書館図書資料論』（御茶の水書房）という本を出した。間もなく、「山陽新聞」（1996.1.15）に本書の書評（中野美智子氏・長岡技術科学大学図書課長）が掲載された。それは「蔵書構築の在り方提言」という見出しで、本書が大学人としての図書館・図書資料との関わりの記録であること、資源共有の思想に支えられて蔵書構築の在り方を改めて提起していること、などと紹介された。

本学附属図書館は、旧制の総合（帝国）、文理科、商科などの大学を前身とする大学につぐ蔵書数を擁する有数の規模の図書館である。しかし、研究図書館としての蔵書は弱体で、また学習図書館としても不十分である。1970年着任以来、私はこの本学の図書館を最大の研究拠点とし、重要な教育拠点として位置づけて、研究と教育に従事してきている。その基本姿勢は、その不十分さを克服することを考え、解決のための提案をするとともに、他方では、すぐれたものを見出し、最大限活用していくということである。

八つの章からなる本書の第4章から第8章までは、この本学の図書館の図書資料とのさまざまな関わりを記録したものである。本学には、旧岡山藩主の池田家文庫という全国に誇る藩政史料のほか、旧勝山藩主の三浦家文書、18の庄屋文書など地方史料がある。それに論及したのが第5章である。その収集は、教育学部や当時の法文学部の学生たちによる卒業論文のための史料発掘を発端としていることが少なくない。第6章は大原農業研究所の蔵書をひきついだ大原農書文庫についてのものである。図書資料の一つひとつが、それぞれの経緯をもって収集・所蔵されているのである。

わが国の近代史研究の重要な資料は官庁統計で、地域史研究では府県統計書である。第7章は、経済学部において整備した岡山県統計書を中央館に配架して、学生たちも自由に利用できるようにし、それを授業に大いに活用していることを記した。本書についてのコメントのなかに、「とりあえず第7章を拝読しましたが、府県統計書を学部教育で活用されていることを知り、感銘を受けました」という近代史学者からのものがあつた。本学図書館には農林業センサスの原資料が収蔵されている。第8章は、将来の当代に関する貴重な歴史史料ともなるこの資料の収蔵の経緯を記したものである。

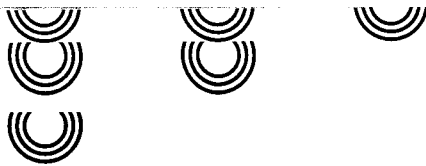
本学図書館は狭隘で、書庫も満杯で、雑然としている。幸い増築が始まり、現在よりも大きい増築部分が建設される。これによって大幅に改善されるであろう。しかし、蔵書や参考部門などのサービスが直ちに改善されるということにはならない。ことに蔵書構築については、組織的な収書組織によって適切に行わなければならない。そしてそのためには、現在の予算制度を前提にすれば、研究費による図書購入を適切なものとする必要がある。第4章はこの問題を論じた本書の中心部分で、いわゆる研究費の図書館図書購入費への振り替えを増加することについても論じた。

大学における研究教育における図書館専門職員の役割は大きい。第1章から第3章は、アメリカ大学図書館とライブラリアンについて論じたものである。図書資料選択にも大きく参画するなど Professor の教育研究をサポートし、独自に学生教育にもあたる、このような Librarian の在り方が、わが国の大学図書館においても実現することを切望している。

（かんだつ・はるき 経済学部教授）







## マスカット

### 大型コレクション南満州鉄道株式会社「社報」マイクロフィルム版 全80リールを購入

上記資料が平成7年度文部省大型コレクションに採択され、このほど受入作業が終わり、利用できるようになりました。

この資料は日本最大の植民地支配会社満鉄の日常活動のすべてを創業時（1907年）から1945年まで記録した資料です。

### CCOD で最大6週間の検索が可能に

CCOD (Current Contents On Diskette) は、これまで一度に一週間分の検索しかできませんでしたが、11月から最大6週間分がまとめて検索できる Multi Issue 検索が可能になりました。あらかじめ検索式をフロッピー等に登録することが必要です。詳細は“Library Refresh” No.93 をご覧いただくか、附属図書館参考調査係へお問い合わせください。(内線 7324)

### CD-ROM サーバ同時接続が25ユーザーに増加

これまでサーバへの同時接続は10ユーザーまで(各種データベース合わせて)でしたが、1月から25ユーザーに増加しました。ただし、各データベースごとの同時接続ユーザー数はこれまで通りです。(CCOD 3ユーザー、MEDLIN・PsycLIT・ERIC・MLA各々8ユーザーまで)

### 附属図書館中央館にパソコン画面拡大用プロジェクター導入

この度パソコンの画面をスクリーンに拡大できるプロジェクターが導入されました。年度始めに行うオリエンテーション等で活用します。

### マイクロリーダープリンター増設

池田家文庫マイクロ版を利用するためのリーダープリンターがもう1台増設されました。池田家文庫のマイクロフィルムの利用が更に便利になります。

### 鹿田分館情報検索コーナー好評

平成7年10月から鹿田分館でもパソコン4台を2階に設置し、CD-ROM サーバシステムの運用を開始しました。一日平均20人程度の利用があり、予約なしで情報検索ができると利用者に好評を得ています。また12月にはUNIXのワークステーションを導入し、電子メール等の研修会が職員対象で開催されました。



## 会議

### ◆学外

- 1.18 平成7年度国立大学附属図書館事務部長会議（於如水会館）
  - ・総合学術情報サービスの実施とその推進体制について

・インターネットを利用した情報発信システムの運用上の諸問題について、その他

### ◆学内

- 11.13 平成7年度特別図書選定小委員会
- 11.13 平成7年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」（人文・社会科学系）選定小委員会
- 11.13 平成7年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」（自然科学系）選定小委員会
- 12.15 平成7年度池田家文庫等特殊文庫委員会
  - ・平成7年度事業計画について
  - ・平成6年度図書館特別事業経費による事業報告について、その他

- 12.22 平成7年度第2回附属図書館運営委員会
  - ・平成9年度歳出概算要求事項について
  - ・図書館資料整備の見直しについて、その他
- 2.15 平成8年度附属図書館備付自然科学系図書資料（本省提出）収書計画に関する選定小委員会
- 2.15 平成8年度図書資料（大型コレクション）収書計画に関する選定小委員会

## 研修

- ・平成7年度学術情報センターシンポジウム  
参加者 古中秀子（10.25）
- ・学術雑誌総合目録と文編1996年版全国調査説明会  
参加者 藤井健司（11.8）

・平成7年度中国・四国地区国立学校等係長研修  
参加者 三浦葉子（11.27～11.30）

## 編集委員会から

例年になく寒い冬からやっと春を迎えることができました。玄関前の楷の木は葉が落ちて一見枯れ木のように見えますが、あぐらの木は赤い実が鈴なりでした。

建築中の新館も6階まで鉄骨が組み立てられ、社会科学閲覧室から今まで見えていた裏の半田山はすでに眺められなくなりました。一抹の寂しさが感じられます。

今回は元図書館運営委員の神立先生に自著について書いていただきました。本誌19号の「特集/蔵書をつくる」でも語られていますが、大学図書館の蔵書構築の在り方が提言されています。図書館員としてあらためて教えられました。

---

岡山大学附属図書館報「楷」 No.23 平成8年3月25日

発行人 森岡祐二 編集 広報委員会 表紙デザイン・レイアウト 清水國夫  
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中三丁目1-1 電話 086-252-1111

